

報



會

會 岳 山 本 日

5

月 三 年 六 和 昭

老登山家の書簡

久しい以前から欲しいと思つてゐたドウグラス・ダブリユー・フレツシユフィールドの著書「イタリヤンアルプス」が去年の暮に漸く私の手に入つた。一八七五年の刊行に係るこの書には、登山家でありまた旅行家であり探検家である著者が、當時人々の顧みなかつたイタリヤ境の山々を、彼のガイドといふよりは寧ろ山友達ともいふべきフランソア・ジョセフ・ドヴァスと共に彷徨ひ歩いた七つの夏の山旅の紀行が収載されてあるが、いま私が書かうとするのはこの書の内容に就てではなく、私の手に入れたこの書のタイトルページの前にはからず挿入されてゐた一葉の手紙に關してである。

その手紙は一八七八年二月九日付のほんの十行ならすの短いものであつて「ヒマラーヤに關する貴稿確かに拜受、五月號には収録の余地なきも次號には考慮可致候」といつた意味が認められ、フレツシユフィールドの署名がある。丁度英國山岳會の編輯をやつてゐた彼の所へ送附された原稿の受取状と推察されるが、この手紙には名宛人の名がない。左の肩に「宛名を省略したこと」に就て御容緒を乞ふ」といふ意味の走り書があるばかりだ。

表紙のウラには型の如く紋所のついた古風な蔵書票が貼つてあつて、ジョン・パントン・ガピンスの名があるが、果して之がヒマラーヤに關

する原稿を寄せた當人であらうか？早速例のアルバインクラブ・レヂスターを引張り出してみると第二巻にチャンと載つてゐる。ガピンスは法官にして印度テリリーに駐在せしことあり。入會資格ヒマラーヤ地方の高き峠とある。愈之に違ひない。これで手紙に就ての疑問は簡単に解決されたが私はいまだ少し書き續ける。

ガピンスは一八〇六年に生れ、この手紙を受取つた翌年一八七九年七十三歳の高齡を以て没したのである。彼が英國山岳會に屢筆を執つたかどうかはさだかでない。否前掲の書簡にあるものも何かの都合で掲載されずに終つたらしい。然し彼が齡七十を越えて尙且つ山に對する愛と熱とを以て寄稿の筆をとつたといふ事は私を驚からず動かしたのだ。

續つて私は吾國登山界の先覺者達のことを思つた。山岳會の先覺の多くはまだ老齡といふには早い前年頃であると推測される。けれども近頃の「山岳」誌上にそれらの先覺達の筆をとられることの極めてすくないのはどういふものであらう。初登攀記録や積雪期登山記録ばかりで「山岳」が埋められるべきでない以上、私は深き經驗をもつ先輩が年若き後進者のためにもつゝ筆をとられたいと思ふ。私達の先輩の山に對する愛と熱といさゝかの動搖冷却をも來たしてゐないであらうことを堅く信するが故に。また先輩の力に俟たねばならぬ廣い分野が貽されてあることを思ふが故に。

一九三二・二五 藤島敏男

有志晩餐會の復活

日本山岳會有志晩餐會なるものが嘗て存在したことはふい「山岳」を御覽の方の承知せらるゝ所であります。以前山岳會の集合は年一回の大會のみでそれも講演が大部分、會員各自が膝を交へて談合ふといふ譯に行かない。ひとつ懇親會兼談話會のやうなものを開かうといふのが話の始まりで私共三人が發起人となり明治四十二年一月十六日第一回有志晩餐會を麹町富士見軒に開いたのであります。爾來年に一二回宛開催し大正八年五月二十五日品川鮎洲・川崎屋に於ける二十一回の會合まで續き、其後いつとはなく中絶し今日に至りました。現在では小集會もあり、虎ノ門に集會室も設けられ會員會合の機會も多くはなりましたが、晩餐を共にしてゆつくり山の話をするにはまだ物足りないやうな氣が致します。それでまた有志晩餐會を復活してはとの話が出たのを幸ひ第一回の發起人たる私共が再び復活のお世話をしやうと思立つたのであります。そして次回からは若い方にお世話を願はふといふのです。

昭和六年三月 辻本満丸

高野鷹藏

三枝守博

追而時日は四月十六日(木)夜、會費は三、四圓。場所は未定です。御参

會下さる方は芝區琴平町一、不二屋ビル内、日本山岳會有志晩餐會係宛御參會の旨御知らせ下されば會場決定次第御通知申し上げます。

山岳第二十六年一號刊行報告

本 欄

雄冬山附近の山道と漁村風景

伊藤秀五郎

卓社大山登行

鹿野 忠雄

グロックナー連峯

高橋 健治

雪崩の見方に就いて

今西 錦司

雜 錄

秩父宮殿下スウイスに於ける御

登山の概要

渡邊 八郎

冬の臼澤岩と權現岳

小池 文雄

伯耆大山

小出 博

北九州の山とところどころ(其二)

竹内 亮

劍澤の雪崩について

梶山 正雄

本邦峠考

細野 重雄

其他雜報、會報、寫眞十二枚

表紙(色刷) 茨木 猪之吉筆

巻頭畫(色刷) 中村清太郎筆

總頁 約二百十頁

定價 二圓

發行 四月五日頃の豫定

圖書基金に關する報告

會報四號にて圖書基金募集を發表したるに多數會員諸氏より申込を得た。圖書係の名に於て茲に謝意を表す。三月一日迄の申込數左の如し
申込者 三十六名 四十六口。

昭和六年度會費

本年度分會費六圓未納の方は至急御拂ひ込み願ひます。振替貯金口座を利用下されば結構です。



社 神 山 雄 山 立

會務報告

一月二十日幹事會

出席 評議員二名 幹事八名

一、「山岳」二十六年一號編輯に關する件

一、圖書整理に關する件

一、法人組織の件

二月五日定例幹事會

出席 評議員四名 幹事十名

一、法人組織の件

一、「山岳」編輯の件

一、本會所有山小屋建設候補地、後立山冷ノ池附近は昨年既に先願者あり。當局はその方に許可する意向なるを以て他に地を選ぶことに決定せり。

一、文部省主催體育展覽會出品の件

第五十回小集會

二月二十四日午後六時半より赤坂三會堂に於て松方幹事司會の下に開催。會報第四號に豫告の如く松方幹事は一九二九年度のバグアリア隊カ

ンチエンジュンガ試登に就て、浦松

幹事は一九三〇年度の國際登山隊の行程に就て概略を講演し、別に渡邊幹事は前者の醫學的報告を略述する所ありたり。終つて參會者のデイスカッションに入るに先立ち、横幹事よりカナデアアン・ロツキー遠征當時の苦心談あり。次で一般の討議に移り十時散會したり。參會者約四十余名。

三月五日定例幹事會

出席 評議員三名 幹事六名

一、「山岳」本年度一號發行期、印刷部數、定價を決定せり。

一、山小屋建設候補地として後立山山脈新越乗越附近を選定。營林署の意向をきくこととす。

一、文部省主催體育展覽會への出品に就き相談せり。

一、四月中旬有志晚會を開くの件

一、登山道標語頒布の件。

退會者

昭和六年二月二十日附
(六一九) 兵庫縣 北谷 典一
同 二月二十二日附 辻川熊太郎
(五六二) 同
同 二月二十六日附 湯村 和吉
(九八四) 同
同 三月四日附 山本 金一
(二〇〇) 大阪市

文部省主催體育展覽會出品

本月十五日より二十九日までお茶の水、東京科學博物館に於て開かれつゝある文部省主催體育展覽會に、本會より、登山用具種々、山岳寫真十數葉、本會並びに各國山岳會の徽章、本會々員地方別分布表等を出陳したり。會期中は午前九時より午後四時まで開場せる趣なり。

山日記編輯經過

一九三一年版山日記の編輯は其後着々進行し、三月中旬には印刷に廻す事が出来る迄になりました。重要な決定事項は左の通りです。

一、發行期日 五月中旬梓書房發賣
一、定價 昨年度より低廉となし、會員には割引をなす

一、各方面より寄せられたる山日記に對する希望を出來得る限り尊重する方針

一、内容の主なるものと執筆者

登山の注意(一般) 木暮理太郎
同 冬期及雪崩 松方 三郎

服裝 同

登山衛生 渡邊 漸

山岳高度表 木暮理太郎

(諸外國、本邦山岳及峠)

山小屋 山案内 角田 吉夫
日程表 渡邊 漸
山岳語彙 藤鳴 敏男
(諸外國、及本邦)

尙氣象、天文、地質其他數項
定價、會員割引に就ては次回發表

「山岳」バックナンバー風下

本會機關雜誌「山岳」も發刊以來二十五年を閉みました。今回バックナンバーの整理のため別記の通り賃價の値下をすることになりました。各號とも貴重なる文獻の載つてゐることは各位の既に御承知の通りであります。御所持なき缺號を御揃えになるには最もいい時機だと思ひます。尙御知己の向へも御吹聴願ひ上げます。

本會にも殘部皆無或は僅少のものを除き今回値下販賣するものは左の各號であります。別に時期を限りませんから何時でも御都合のよいとき御求め下さるやう。代金は振替口座東京・四八二九へお拂込下さい。

昭和六年三月 日本山岳會



臺灣山地測量の功勞者の計

野呂寧氏本年三月初め東京市外中野町の自邸に逝かる。氏は明治三十二年より三十有餘年臺灣總督府に在勤

せられ、臺灣統治上の功勞者であつたが、山岳界の者には臺灣山地測量の先覺者として長く記憶せらるべき人である。

今日臺灣の山岳に登攀する者の頼りとする地圖が、領臺後まもなく野呂氏が多大の危険を冒して蕃地に入り測量製圖せられたものと大差なきを想ふとき、その功績のいかに大なりしかを知り得るであらう。臺灣山岳會ではその功勞に對し昭和四年同會の名譽會員に推薦された。氏は本會に會籍を有せられたることなきも雜誌「山岳」に稿を寄せられ、第十一年第一號に「臺灣の山岳」同じ年の第三號に「南湖大山方面探検記」の二文が收載された。

今その計に接し本會は茲に深き弔意を表するものである。(T.F.)

陸地測量部新刊地圖目錄

一萬分一地形圖新版(二色刷)

東京近傍21(田園調布) 22(石神井)

25(練馬) 26(二子) 27(溝口)

二萬五千分一地形圖新版

仙臺近傍8(富谷) 9(仙臺東北部)

12(荒濱) 14(仙臺西北部)

同 修正版

横濱近傍5(横濱東部)

同 鐵道補入版

盛岡近傍4(盛岡)

山田及松阪近傍5(鳥羽)

奈良近傍7(奈良)

大阪近傍16(信太山)

五萬分一地形圖修正版

松山13(柳井)

同 鐵道補入版

夕張岳3(佐念嶺) 浦河13(佐瑠太) 釧路6(尾峯)

二十萬分一帝國圖新版

那覇

外三角及水準測量成果表 修正 四十七版

二十萬分一 名古屋地方圖(九色刷表紙附)

合計

六十七面(一月三十日)

一萬分一地形圖新版

下志津及智志野近傍10(檢見川)

(稻毛) 14(幕張)以上假製版

同 修正版

横濱近傍 4(川崎)

同 鐵道補入版(二色刷)

大阪近傍 2(大阪東北部) 15(大阪西南部)

神戸近傍 1(西宮北部)

二萬五千分一地形圖新版

仙臺近傍 11(三軒茶屋) 13(根白石) 16(岩沼)

松山近傍 2(波止濱)

同 修正版

沼津近傍 2(御殿場)

同 鐵道補入版

新發田及新潟近傍 5(新發田)

都城近傍 6(末吉) 8(財部) 9(岩川)

五萬分一修正版

横須賀13(小田原) 豐橋9(明知)

10(足助) 鹿島16(岩國) 山口

3(鹿野) 11(山口) 15(西市)

二十萬分一帝國圖

大多喜 豐橋 山田 長岡 岐阜

二萬五千分一スキー用圖修正版

赤倉近傍圖(菊版二色刷)

(二月二十八日)



社 神 三 父 叔

圖書紹介

ニージーランドの山

或る親しい岳友が「これは君の好きな本だぜ」と言つて、古色蒼然たる一冊の洋書を贈つて呉れた。禿ちよるな脊皮を見ると Climbs in the New Zealand Alps とある。

著者は Edward A. Fitz Gerald 今から三十五年前の一八九六年に、ロンドンの T. Fisher Unwin から發行されたものである。従つて現在ではもう全く out of date な山岳書の部類に屬し、努めて山の珍本を蒐めてゐる人達の眼にさへ、減多に觸れなからうといふしるものだ。併し私は、此本の發行された年に同じく此の世に生れ出たといふ奇縁も手傳ひ、その古色蒼然たる所を未だ半頁と讀まないさきから、此の本に對して可なり興味を覺えたのである。

先づ恭しく扉を開けると著者の同行者に彼の有名な Sir Martin Conway & Professor T. G. Bonney, C. L. Barrow などの名が見える。大島さんのパドミントン・スタイル

に出てくる銅版畫 British hill weather の作者である H. G. Willin 此の本にも亦あのやうな輕妙なスケッチを寄せてゐるなんか、一層私を喜ばせてくれた。

一體、私は私の中學時代に、地理の教師からニージーランドにアルプスなんて名乗つても差支へないやうな高山が澤山の氷河に取圍まれて聳えてゐるといふやうなことを、果して教へて貰つたであらうか。いや儘かに教へつたのを私の愚昧さから竟に彼のニージーニアあたりとごつちやにして吞込んで了ひ、ニージーランドと言へば、悍猛極まりない喰人種や、馴悍無比な獅子・虎・豹などが、物凄く深奥なチャンドルを背景として縱横無盡に暴れまわつてゐる未開野蠻の境地ぐらゐにしか考へて居なかつたのである。

さうしたアブノーマルな私の頭に著しきビンと應えたのは、實に、此の本に挿入してある同島の最高峯 Mt. Cook (12,349) の恒雪に輝く崇高な姿(同じく第二の高峯 Mt. Tasman (11,475) や、また E. A. Fitz Gerald の一行によつて初登攀された Mt. Sealy (8,631) 等の美はしき寫眞だつた。

これは聊か面白いといふと、興に乗じて拾ひ上げた山が、八千呎以上のものだけでもザツと四十ばかり有つた。而も夫等の山々が何れも大小さまざまの氷河によつて取圍まれたがラゲンと高く聳えてゐるのだから全く以て羨望の至りである。

左に山名の明かな一萬呎以上の山を並べて何かの御參考に供しよう。

Mt. Cook (12,349) Mt. Tasman

(11,475) Mt. Dampier (11,267)

Silberhorn (10,756) Mt. Lendenfeldt (10,508) Mt. Maite Brun (10,421) Mt. Sefton (10,350)

Mt. Haast (10,294) Mt. E. de Beaumont (10,200) Glacier Fk (10,107) Minaret Peaks (10,058)

Mt. Haidinger (10,054) Mt. Stokes (10,034)

高畑 棟材

Akademischer Alpenclub Bern (A. A. C. B.)

— 25 Jahresbericht —

チュールビ、インスブルック、ミ

エンヘンなどのアカデミのクラブと

並び稱せられるベルンのアカデミの

最近の年報である。恐ろしく簡素な

表紙——あつさりした色模様にはク

ラのマークだけを金で押した表紙が

眼につく。

菊版六十四頁、挿繪數葉。

友人筋の一流所と肩を列べるやう

な猛者を輩出してゐる有名なクラブ

の二十五年號としてはあまりに淡々

としてゐるやうにも見えるが、此の

團體の從來の行き方を心得てゐる者

には之が却つて當然であるやうにも

想はれて一しは奥床しい。

巻頭ケムプ氏のクラブ二十五年度史

を掲ぐ。創立當時の有様、金の苦面

なし乍らピーチホルンやオクセンタ

ールの山小屋を算段した頃の話、エ

ンゲルヘルナー登壇案内を物した頃の事、そしてクラブ員の手に致行せられたる幾つかの名だる登壇、最後に會員の事ども、他の山岳會との關係などを記す。一つ／＼の事項が不思議に現在の我々の目前に横はる色々の問題と縁があるやうに思はれ、全くの他人事とは讀まれない節が多い。アカデミッシェル・アルハンクルアといへば學生の山岳會である。併し卷末の名簿を見ると學生の現役軍 (Active Mitglieder) は僅に十二名にすぎない。會としての水準が高いだけに會員となる爲に如何に厳しい試験が行はれてゐるかが容易に想像せられる。先輩 (Alte Herren) たる會員は合計七十四人である。二

り、登壇に關する記事は新登壇記録もろ共、至極簡単に收められてゐる。その他は一年間の會務報告、圖書部、小屋係の報告。寫眞にしても瑞西のものば之といふ變哲もない寧ろ平凡なものである。

要するに此の一冊子を通覽して感ぜらるゝことは「俺達」は山登りをする仲間なんだ。年報は會の備忘録として一年間の業績を記録にとめておくに足るものであればいい、とてもいつたやうな至極あつさりした編輯者の態度である。會報の大小が登山團體としての會の活動を物語るものではない。こんなことは判りきつた事だが、此のベルンの A・A・C の二十五年號を手にして特に感慨の深きものあり、殊に又、一度圖書室の棚におさめられてはこんな小さいものは誰一人態々探して出を見る人もあるまいし、又どう見ても人の眼をひくやうな見映えのする華美やかさもつてゐない品の事故、此の所來の年報を取り出して御紹介に及ぶことを圖書係の責任と心得た次第である。

代の量地學的趨勢を窺視する事が出来、又一部は重要事項の概説をも試みたものであるから初見の讀者に對しては斯道探究の階梯ともなり、又特殊の研究諸賢に對しては研究探査の一助たらんことを希ふものである」と述べられてゐるが、積年測量のことに當たられ、また關係史料の蒐集に努められる著者の貴重なる材料及體裁は本書に明快に盛られてゐる。山岳人の地圖に對する研究的興味を喚起するに足る好者として推薦するに躊躇しない。 藤島 敏男

加されたのは當然と言へ大變喜ばしいことである。清楚なる装釘もいたゞ惜しまれるのは當初から改題本の如き内容體裁のものな何故出版されなかつたかといふことである。前書の結論に述べられた所によつて多くの讀者の受けた忌はしき疑念が今日に於ても尙消滅し難きものとなつてゐるのを思ふとき、なほさらその感が深い。 藤島 敏男

現役軍 (Active Mitglieder) は僅に十二名にすぎない。會としての水準が高いだけに會員となる爲に如何に厳しい試験が行はれてゐるかが容易に想像せられる。先輩 (Alte Herren) たる會員は合計七十四人である。二

のあり、殊に又、一度圖書室の棚におさめられてはこんな小さいものは誰一人態々探して出を見る人もあるまいし、又どう見ても人の眼をひくやうな見映えのする華美やかさもつてゐない品の事故、此の所來の年報を取り出して御紹介に及ぶことを圖書係の責任と心得た次第である。

（昭和六年二月・東京・古今書院刊行・菊版一七〇頁・圖版二〇・定價壹圓六拾錢）

山岳篇・日本アルプス 去年は改造社の日本地理大系と、新光社の日本地理風俗大系とが、時を同うして出版された。

は寧ろ科學的に山岳の紀文を組織立て、あるものと云ふことが出来る。併しこれは出版所の編輯の方針の差であつて、必しも優劣を判すること出来ぬ。寫眞版は大體に於て改造社版のものがよいやうである。兎に角かう云ふ贅澤な出版物が、僅に金三圓未滿で上梓せられ、私達は居ながらにして海内の山岳景觀に親しむことが出来ると云ふことは文化の有難さだと思ふ。これが大量生産でなく、部數を制限して、寫眞版一々につてよく精密な注意を拂つたならば、更に立派なものが出来たらうと、自分の勝手な立場から老婆言を吐いておく。 冠松 次郎

十五年後に永へ此の會員數を有することは此のクラブのもつ一つの注目すべき特色である。現會員の死亡せる十一人を加へて調べてみても創立年次の十人の入會が最も多く、翌年は九人になりその翌年は急に一人となつてゐる。爾來最も多き新入者に加へた年と雖ども七人を登らず全く新手を入れてゐない年もある。一つのクラブが如何なる方向をとるべきかはそのクラブの創立者や組成者の意思によつて自ら決定せられる。併し此のベルンの場合は嚴選主義の最もなるものとして注目し得るであらう。精兵主義のクラブの年報であるから、通り一邊の登山記事のない事は已むを得ない。纏つたものにしてはカラコラムに行つたウィースの記録とジアヴァよりの通信があるき

（松方）

（昭和六年二月・東京・古今書院刊行・菊版一七〇頁・圖版二〇・定價壹圓六拾錢）

山岳篇は改造社の別冊であつて、日本全国の山岳地の寫眞を遍く蒐集して、一々親切なる説明を加へてゐる。加ふるに、巻頭には著名の登山家、科學者が、各得意の題目によつて、山岳溪谷、植物動物等について執筆された、大寫眞帖であると共に、一面當たる山岳文集である。

日本アルプスは、新光社が地理風俗大系の中中部地方の篇より、特に別冊として出版したものであつて、所謂日本アルプス地方の山岳寫眞を網羅して説明を加へてゐる。改造社のが文集として、その巻頭に記事を集めたのに對し、これは必要に應じて寫眞に並行して、その地方別に、文章を配置してゐる。前者は百花競妍の文藻の集りであるとするれば、後者は寧ろ科學的に山岳の紀文を組織立て、あるものと云ふことが出来る。併しこれは出版所の編輯の方針の差であつて、必しも優劣を判すること出来ぬ。寫眞版は大體に於て改造社版のものがよいやうである。兎に角かう云ふ贅澤な出版物が、僅に金三圓未滿で上梓せられ、私達は居ながらにして海内の山岳景觀に親しむことが出来ると云ふことは文化の有難さだと思ふ。これが大量生産でなく、部數を制限して、寫眞版一々につてよく精密な注意を拂つたならば、更に立派なものが出来たらうと、自分の勝手な立場から老婆言を吐いておく。 冠松 次郎

日本地圖測量小史 本會々員高木菊三郎氏の近著である。著者はその緒言に於て「本書は我國に於ける地圖的測量の變遷を闡明し、併せて之が地圖的表現の基礎たるべき古來の測量、乃至之が關係の諸數術に及ぼし、諸手法を略述し——中略——其史實の大綱を録載したものであるから一覽的に其時

（松方）

（昭和六年二月・東京・古今書院刊行・菊版一七〇頁・圖版二〇・定價壹圓六拾錢）

山岳篇は改造社の別冊であつて、日本全国の山岳地の寫眞を遍く蒐集して、一々親切なる説明を加へてゐる。加ふるに、巻頭には著名の登山家、科學者が、各得意の題目によつて、山岳溪谷、植物動物等について執筆された、大寫眞帖であると共に、一面當たる山岳文集である。

日本アルプスは、新光社が地理風俗大系の中中部地方の篇より、特に別冊として出版したものであつて、所謂日本アルプス地方の山岳寫眞を網羅して説明を加へてゐる。改造社のが文集として、その巻頭に記事を集めたのに對し、これは必要に應じて寫眞に並行して、その地方別に、文章を配置してゐる。前者は百花競妍の文藻の集りであるとするれば、後者は寧ろ科學的に山岳の紀文を組織立て、あるものと云ふことが出来る。併しこれは出版所の編輯の方針の差であつて、必しも優劣を判すること出来ぬ。寫眞版は大體に於て改造社版のものがよいやうである。兎に角かう云ふ贅澤な出版物が、僅に金三圓未滿で上梓せられ、私達は居ながらにして海内の山岳景觀に親しむことが出来ると云ふことは文化の有難さだと思ふ。これが大量生産でなく、部數を制限して、寫眞版一々につてよく精密な注意を拂つたならば、更に立派なものが出来たらうと、自分の勝手な立場から老婆言を吐いておく。 冠松 次郎

會員通信

福岡山岳談話會

此會は一月卅一日夜縣教育會本部に於て本會々員竹内亮氏の司會により第二回の集會を開催、席上約二時間互に福岡師範教諭金尾宗平氏の「北九州の山地々形について」なる有益なる講演あり。來會者十五名、



會員大野英一、大野源五郎、山田光男の三氏出席せられたり。

香妻山

紀元節の休みに五色の青木小屋へいつて、また五色へ戻るのと思つて、十日の朝六時半に小屋を出た。それから沼尻温泉へ出るまでの行程はざつと左の通り。

八時家形山、十時一切經山、十一時半東吾妻、三時相ノ峯、四時半横向温泉、午後八時沼尻温泉着。

うつくしい樹氷に飾られた深い林の中をほんとうにひれもす滑つた。

二月十二日

黒田 正夫

上州鹿澤温泉

二月の十五日から四日間鹿澤へいつてきた。滞留客僅かに六人、雪はたつぷり、のどかに滑り慕したといふより外に書くこともない。たゞあの新張からの地蔵峠道を歩いて、はじめて山の湯へつた頃との變りやうの甚しいのに驚かされた。奈良原

温泉や發電所はともかく、三十番茶屋、六十番の小屋、峠の上の小屋はどれも跡方もなくなつてしまつたし五十番茶屋も住む人もない。

もたないで倒潰しさに傾いてゐる。四十番茶屋の口の達者な女房もゐない。そして三十五番茶屋なんていふのが新しく出来てゐる。それに

植林の唐松がおそろしいほど伸びて所によるとまるで風景が變つてしまつた。温泉そのものも左側の棟しかなかった頃から見れば大した發展振

りだ。九年やそこらでかうも變るものかと驚かすにあられない。僕達みたいな若輩でもこんな變遷に遇ふのだ。まして明治時代から山に登り續けてゐる先輩達が最近の山のひらけやうに目をみはるのも無理からぬことだと思つた。

一九三二・二〇 藤島 敏男

圖書室開室日當番

四月

一日	藤田	十七日	島山
六日	冠	二十日	角田
八日	木暮	二十二日	浦松
十日	横	二十四日	渡邊
十三日	松方	二十七日	藤島
十五日	松本		

五月

一日	藤田	十八日	角田
四日	冠	二十日	浦松
六日	木暮	二十二日	渡邊
八日	横	二十五日	藤島
十一日	松方	二十七日	藤田
十三日	松本	二十九日	冠
十五日	島山		

圖書室は右の日の午後五時半頃より開いております。

編輯後記

圖書紹介を多く収めたので原稿の一部を割愛しました。浦松氏旅行中にて、臨時編輯係事務不慣の爲發行の遅れた事をお詫びします。

角田

「山岳」パンクナンバー改正定價

Vol. No.	改正定價(舊定價)	送料
II 3	2.00	〃
III 3	2.00	〃
IV 1	2.00	〃
V 2	2.00	〃
VI 1	1.00	〃
VII 1	1.00	〃
VIII 1	1.00	〃
IX 1	1.00	〃
X 1	1.00	〃
XI 2	1.00	〃
XII 1	1.00	〃
XIII 1	1.00	〃
XIV 1	1.00	〃
XV 1	1.00	〃
XVI 1	1.00	〃
XVII 1	1.00	〃
XVIII 1	1.00	〃
XIX 1	1.00	〃
XX 1	1.00	〃
XXI 2	1.00	〃
XXII 1	1.00	〃
XXIII 2	1.00	〃
XXIV 2	1.00	〃
XXV 1	1.00	〃
XXVI 1	1.00	〃
XXVII 1	1.00	〃
XXVIII 1	1.00	〃
XXIX 1	1.00	〃
XXX 1	1.00	〃
XXXI 1	1.00	〃
XXXII 1	1.00	〃
XXXIII 1	1.00	〃
XXXIV 1	1.00	〃
XXXV 1	1.00	〃
XXXVI 1	1.00	〃
XXXVII 1	1.00	〃
XXXVIII 1	1.00	〃
XXXIX 1	1.00	〃
XXXX 1	1.00	〃
XXXXI 1	1.00	〃
XXXXII 1	1.00	〃
XXXXIII 1	1.00	〃
XXXXIV 1	1.00	〃
XXXXV 1	1.00	〃
XXXXVI 1	1.00	〃
XXXXVII 1	1.00	〃
XXXXVIII 1	1.00	〃
XXXXIX 1	1.00	〃
XXXXX 1	1.00	〃

昭和六年三月二十五日印刷
昭和六年三月二十七日發行

發行所

日本山岳會

浦松佐美太郎
東京市芝區
日本山岳會

(所屬主堂明図)

山岳寫眞の

現像・焼付・引伸

永年日本山岳會々員の御用命を賜る弊店へ

寫眞機と材料

光畫堂

東京芝區宇田川町二
電話芝二〇二〇番

圖書基金申込書

昭和六年度圖書基金

住所

氏名

日本山岳會圖書係行

東京市芝區

琴平町不二屋ビル

美津濃の登山靴と リックサック

山行に最も大切な完全無欠の
アマハーモデルの登山靴やキ
スリングモデルリックサック
等常に豊富に取揃へてござい
ます。



登山靴 ¥10.00.....¥22.00

リックサック

¥3.50.....¥11.50

大 阪
東 京
神 戸

淀 屋 橋
小 川 町
元 町 通

美津濃

名 古 屋
京 都
大 阪 南

大 須 門 前
四 條 大 通
日 本 橋

板倉勝宣遺稿
山と雪の日記
遺稿 横有恒
此本の由来について 松方三郎
其他
¥ 2.50 -0.08

辻村伊助遺著
スウィス日記
遺稿 武田久吉
純情の人伊助 高野麗蔵
横スウィス日記發售開始
スウィス日記の由来
小島島水
¥ 4.50 -0.27

ハイランド
題 小島島水
短く笑しかつた故人の生涯
辻村太郎
亡友「辻」 近藤茂吉
¥ 3.00 -0.27

山日記
1931年版
五月初旬出来
東京市神田區北甲賀町
四番地

梓書房
電話神田 2775番
振替東京 78644番

嘗て帝國大學スキー山
岳部より限定出版せし
「銀嶺に輝く」の内四氏の
登山経歴・遺稿等及寫眞
に大増補訂正を加へたる
ものである。

客冬一月、吾が登山
界のみならず、一般社
會の耳目を聳動し、慄
然たらしめたる、立山
劍澤に於ける遭難者窪
田・田部・松平・土屋
の四氏と山案内二君と
の遭難記録、遺稿を収
めたるものである。
即ち本書によつて有
爲なる數氏の尊き犠牲
を永遠に記念し、且つ
は岳友諸兄の要望に應
へんとした。冀くは清
鑑を賜へ。

目次
遭難記録
準備出發から遭難まで
搜索から發掘まで
一、第一回の搜索隊
二、第二回の搜索隊
三、告別
遭難の發見
遭難の原因
感想
劍澤の搜索隊に加
はつて(新稿)
遺稿
窪田他吉郎・田部正太郎
松平日出男・土屋秀直
の四氏の登山経歴及遺稿
圖版
立山略圖
雪崩の経路見取圖
雪崩の経路と小屋の位置
概念圖
劍澤小屋概略圖

菊判約二百頁裝釘清雅
寫眞圖版三十

定價二圓 送料廿七錢

夕日の劍澤 寫眞
窪田他吉郎君肖像
松平日出男君肖像
土屋秀直君肖像
佐伯福松君肖像
窪田他吉郎君遺書(三三)
最後の記念撮影(三三)
露出せる劍澤小屋
現場に到着せる搜索隊
發掘作業開始の状況
發掘作業の状況
窪田君の介抱の發見
搜索の日
源次郎の波終る峰
早尾根と八峰
鶴ヶ御前より大日岳を望
十六耗フイルムスタイル
弘法茶屋附近
劍澤小屋にて
鶴ヶ御前北の肩へ

東京帝國大學 山の會編著

劍澤に逝ける人々

(刊新最)